

氏名（本籍）	李 ^イ コットン（大韓民国）
学位の種類	博士（美術）
学位記番号	博美第217号
学位授与年月日	平成20年3月25日
学位論文等題目	〈作品〉Monuments to Reminisce 〈論文〉「自然と生命そして光の造形」産業陶磁デザインと表現
論文等審査委員	
（主査）	東京芸術大学 教授（美術学部） 島田文雄
（論文第1副査）	〃 〃（〃） 松尾大
（作品第1副査）	〃 〃（〃） 豊福誠
（副査）	〃 〃（〃） 橋本明夫
（〃）	〃 〃（〃） 北郷悟
（〃）	東京国立近代美術館 工芸課長 金子賢治

（論文内容の要旨）

本論文は、自然から感じた感動を「美しい生命の形」として創出していく制作に理論的考察を加えて記述することを目的としている。

論文は二つの章で構成されており、思考に関する第1章では、制作のモチーフ（題材）と工芸観を考察する。モチーフについては、自然物のなかで特に花や昆虫などの形態をいかに生かし、また、それにどのような意味が込められているかを述べる。工芸観については、実用性と芸術性の関係に焦点を当てて考察する。第2章では、主として制作の技術的側面に関する章である。

第1章「自然と生命そして芸術」は、六つの節から構成されている。モチーフについては、私のモチーフを直接叙述する節として、制作初期のモチーフを記述する第1節と、中期、後期のモチーフを記述する第5節となっている。モチーフの背景となっている伝統を叙述する節としては、西洋の背景を記述する第3節と、東洋のそれを記述する第4節とから成っている。また、工芸観については、出発点となった工芸概念を述べる第2節と、現代到達した工芸概念を提示する第6節とから成っている。

1.1の「自然と芸術における生命の意味」節では、自然のイメージから対象を選択し、作品として形状化されるまでに至ったことについて記述する。それには母国である韓国の1980年代に行った国家による都市化政策でなくなった故郷の経験がきっかけとなっている。

1.2の「工芸としての陶芸—アーツ・アンド・クラフト運動」節では、制作初期の工芸概念である「生活に基づいた実用的工芸としての造形陶磁」について述べる。これは、土という素材で自分の感性を表す純粋芸術よりも、生活に基づいた実用的工芸の中で個性を持つ造形陶磁を作ることである。

1.3の「美しい生命の形—アール・ヌーヴォー」節では、自然の対象を題材として、美しい生命の形を表現するテーマの中、私のモチーフは花や昆虫などを選択し、光を意識して制作する。それはアール・ヌーヴォーの工芸作家エミール・ガレの作品でも見られる題材とテーマである。そしてガレの作品には、日本人の工芸制作に見られる「自然観察→写生→造形→実用性」という一貫した過程に基づいていることを指摘する。

1.4の「美しい生命の形—昆虫」節では、伝統的題材である昆虫の象徴的意味と私の作品で象徴する昆虫の意味に関して考察する節である。韓国の美術や工芸に現れている昆虫の象徴的意味は、吉相の意味

を持ち、現世的幸福を祈願する。反面、私にとって昆虫というのは、自然の暖かい記憶であり、美の根本であり、カタルシスの源泉である。

1.5の「美しい生命の形－花＋昆虫」節では、最初は蓮の実そのままのイメージを追求して照明の形態をデザインしたが、作っているうちに蓮の実だけではなく、花のつぼみのイメージも意識し、デザインにバリエーションを与えた。穴の部分に透かし彫りをして光の強弱を調節した照明の光は、照明の役割と共に造形の対象として理性と感性を刺激し、自然の温もりと純粹さを感じさせる心理的役割も果たしている。自然の有機的な形から感じられる線とともに、内面に存在する調和を強調する韓国の曲線に対する美意識と、自然への帰依・同化を意味する白色に対する美意識は、いつの間にか私の無意識のなかでも作用し、創作において独自の線の土台になっていることを述べる。

1.6の「工芸的造形」節では、今までの工芸への考えであった「生活に基づいた実用的工芸としての造形陶磁」の思考から免れて、「陶磁のプロセスに導かれた工芸的造形としての陶磁」へ思考の範囲が拡散していくことを述べる。工芸としての造形陶芸とは、経験を通じて身についた土に対する感覚と芸術としての美的表現能力が結合されて、陶磁のプロセスにあわせて作り出すことである。

その思考の拡散は、機能という光の照明の役割から免れて、自ら光を発散する明かりとして光を造形の要素としてだけ意識することになる。そして自然を対象として「美しい生命の形」を表現する私の作業で明かりの光は、自然そのままの生命力を意味する。その生命力の中心には昆虫がいる。昆虫は自然の生命力を引き次いでいく存在であり、私の分身であり、未来の希望である。

第2章「制作課程そして技法」では、制作過程説明のため、石膏使用と鋳込み成形の歴史的背景を初め、石膏の使用法、泥漿の作り方、器形・昆虫の制作過程、そして陶磁のプロセスである釉掛けと焼成の技術について記述する。